今月の話題 NO.116

アキグミ

アキグミは常願寺川の川原では最もたくさん生えている木です。特に大川寺（だいせんじ）から大日橋にかけては、アキグミの林が10Kmもきれ目なくつづいていて日本一大きな群落だと言われています。グミが無数に生えていることから、グミの生えている川原は陽あたりがよくて、さぞ生育しやすい土地のように思えます。しかし、砂と石ばかりの川原は植物にとって決してすみよい場所ではありません。川原に生えている植物の種類はせいぜい50種類で、呉羽山の10分の1にもなりませんし、その中で木となるとグミのほかにヤナギとニセアカシアぐらいしか生えていません。川原では、川の水が増えると植物は根こそぎ流されてしまうし、また石と砂の地面には植物が大きく成長するだけの養分はほとんどないからです。

川原で木として生活するためにどうしても必要なしくみとして、地上部が流されても地下に残った株から早く芽を伸ばすことができること、養分を効率よくとれるようにすることが必要です。

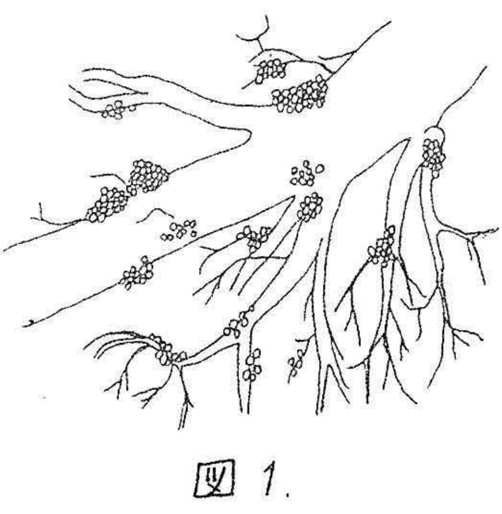

図 1.

まず、木を掘りおこして根のようすを調べてみましょう。直径が1ミリほどの丸い粒（根粒という（図1））が、

たくさん根にくっついています。根粒の中には、普通、菌類がすみついていて、植物が直接栄養にできない窒素を使って生活しており、根はこの菌類の栄養分を吸いとっています。アキグミの場合も自分の根についている根粒から栄養分をとっていると考えられます。この栄養のおかげで根はより深くしっかりと土をつかみ、地上の幹や葉などにたくさんの養分を送っていると考えられます。

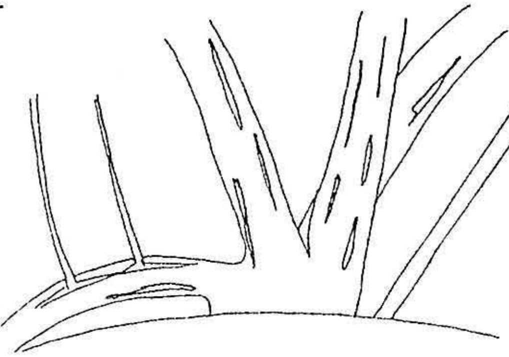

図 2.

次にアキグミの幹の地面の生えぎわを見てみましょう（図２）。まれに１本の太い幹が立っているものもありますが、ほとんどのものは生えぎわから何本もの幹が出ています。そして、どの株の幹の太さもほとんど同じでした。このことから、過去に１度は、大水で地上部が流されて折れてしまったか、うずまった後、残った株からふたたび芽がのびてきたものだということがわかります。

川原のように、太陽の光を十分に受けることができる場所は、たいてい土がやせていて、こんな場所に優先して生育するには、植物はそれなりの力やしくみを持っていなければならないのです。

（太田道人）

富山市科学文化センター
富山市西中野町1丁目8番31号（〒939）
電話 富山（0764）91－2123（代表）

昭和62年11月1日 発行